

## 子どもを持つことに関する母親の意識 —浦河町の調査を通して—

加藤 春子\*

### はじめに

平成12年における都道府県別合計特殊出生率は<sup>1)</sup>、東京都が1.07と最も低く、北海道は1.23と2番目に低かった。このように、北海道の合計特殊出生率はここ数年全国的にみて低い状態が続いており大きな変化は見られない状況で推移している。

北海道のこのような少子化の下で子どもを持つことに関する母親の意識については、前回札幌市で調査を行い若干の知見を得たので、今回は浦河町役場の協力を得て1年間に亘って同様の調査を行い検討を加えた。さらに、子どもを持つことに関する意識に影響を与える要因についても検討を加えた。

### I 調査方法

#### 1. 対象

対象は4カ月児から3歳児までの子どもを養育している母親294人である。

#### 2. 方法

浦河町役場に調査の協力を依頼した。役場が行う4カ月児健診、1歳6ヶ月児健診、3歳児健診の案内送付時に質問紙を同封し同意を得られた者に自宅で記入してもらい健診の当

日に受付で回収した。

子どもを持つことに関する意識の質問項目は Vinokur-Kaplan, D. の価値モデル<sup>2)</sup>を用いた。測定尺度は、「非常に重要である」が4点、「少し重要である」が3点、「あまり重要でない」が2点、「全く重要でない」が1点と点数化して因子分析を行い、抽出された因子軸を Vrimax 回転した後に因子の解釈を行った。分析には、HALBAU Version 5.37 を用い、質問紙の Cronbach  $\alpha$  信頼性係数は 0.855 である。

#### 3. 配布数及び回収数

質問紙の配布数は320部、回収数は320部、有効回収数は294部、有効回収率は91.9%である。

#### 4. 調査期間

平成11年6月1日～平成12年5月31日までである。

### II 結果

#### 1. 対象の背景

対象の背景は表1に示す通りである。子どもの出生順位では第1子が99人(33.7%)、第2子が142人(48.3%)、第3子が37人(12.6%)

\*北海道浅井学園大学人間福祉学部福祉心理学科

キーワード：意識、子どもを持つこと、母親、両親

と第2子の占める割合が最も多かった。

表1 対象の背景 ( ) 内は%

出生順位	
第1子	99(33.7)
第2子	142(48.3)
第3子	37(12.6)
第4子	15( 5.1)
第5子	1( 0.3)
母親の年齢	
20歳未満	1( 0.3)
20～24歳	22( 7.5)
25～29歳	94(32.0)
30～34歳	110(37.4)
35～39歳	60(20.4)
40歳以上	7( 2.4)
母親の就業	
有職者	104(35.4)
専業主婦	190(64.6)
就業形態	
家業の手伝い	47(45.2)
フルタイム	30(28.9)
パートタイム	26(25.0)
内職	1( 0.9)
父親の年齢	
20歳未満	1( 0.3)
20～24歳	13( 4.4)
25～29歳	58(19.8)
30～34歳	100(34.1)
35～39歳	72(24.6)
40歳以上	49(16.7)
無回答	1( 0.3)
父親の職業	
会社員	114(38.8)
公務員	63(21.4)
団体職員	26( 8.8)
漁業	14( 4.8)
農業	15( 5.1)
酪農	7( 2.4)
林業	1( 0.3)
自営業	29( 9.9)
その他	25( 8.5)

母親の年齢は、20～24歳が22人(7.4%)、25～29歳が94人(32.0%)、30～34歳が110人(37.4%)等で30～34歳が最も多くを占めている。また、最小年齢は19歳、最大年齢は45歳、平均は $30.8 \pm 4.5$ 歳である。

母親の就業状況は、有職者が104人(35.4%)、専業主婦が190人(64.6%)と専業主婦の方が過半数を占めている。就業形態は、家業の手伝いをしている者が47人(45.2%)、フルタイムで就業がしている者が30人(28.9%)、パートタイムで就業がしている者が26人(25.0%)等で家業の手伝いをしている者が最も多かった。

父親の年齢は、20～24歳が13人(4.4%)、25～29歳が58人(19.8%)、30～34歳が100人(34.1%)等で母親と同様に30～34歳が最も多くを占めている。また、最小年齢は19歳、最大年齢は51歳、平均は $33.5 \pm 5.7$ 歳である。

父親の職業は、会社員が114人(38.8%)、公務員が63人(21.4%)、団体職員が26人(8.8%)等で会社員が最も多かった。

## 2. 結婚後に子どもを持つ迄の平均年数

結婚後に子どもを持つ迄の平均年数は、表2に示すように第1子が1.6年、第2子が4.0年、第3子が6.3年、第4子が8.0年、第5子が18.0年である。間隔をみると、第1子から第2子までの間が2.4年、第2子から第3子までの間が2.3年、第3子から第4子までの間が1.7年、第4子から第5子までの間が10年である。

表2 結婚後に子どもを持つ迄の年数

出生順位	平均年数
第1子	1.6
第2子	4.0
第3子	6.3
第4子	8.0
第5子	18.0

### 3. 理想の子ども数

理想の子ども数は、表3に示すように1人と回答した者が5人(1.7%), 2人と回答した者が101人(34.4%), 3人と回答した者が143人(48.6%), 4人と回答した者が38人(12.9%)等で3人と回答した者が最も多かった。

表3 理想の子ども数 人 (%)

1人	5(1.7)
2人	101(34.4)
3人	143(48.6)
4人	38(12.9)
5人	7(2.4)

### 4. 将来予定している子どもの数

将来予定している子どもの数は、表4に示すように1人と回答した者が12人(4.1%), 2人と回答した者が153人(52.0%), 3人と回答した者が104人(35.4%), 4人と回答した者が22人(7.5%)等で2人と回答した者が最も多かった。

表4 将来予定している子どもの数 人 (%)

1人	12(4.1)
2人	153(52.0)
3人	104(35.4)
4人	22(7.5)
5人	3(1.0)

### 5. 子どもを持つことの意識に関する因子分析による結果

因子分析による結果は表5に示す通りで、5因子抽出された。各因子のCronbach信頼性係数は、第1因子が0.817, 第2因子が0.776, 第3因子が0.814, 第4因子が0.775, 第5因子が0.711である。

第1因子では、社会から一人前の大人として認められる(0.720), 女性としての機能を果たす(0.707), 地域や社会に貢献する(0.649)などの項目に高い負荷量を示したので、この因子は子どもを持つことによる対社会的評価の意識が表れていることから「対社会的」因子と名付けた。

第2因子では、楽しい経験をする(0.681), 新しい経験をする(0.610), 夫婦の絆を強める(0.592)などの項目に高い負荷量を示したので、この因子は家庭の中に新たに子どもが加わり子育てを通じて新しい発見や経験をすること, また子どもを育てるという共通の体験を通して夫婦の絆が強まるとの意識が表れていることから「体験」因子と名付けた。

第3因子では、子どもの教育費について負担に思う(0.886), 子どもの養育費全般について負担に思う(0.865), 満足できる生活水準を維持できなくなる(0.421)などの項目に高い負荷量を示したので、この因子は子ども

の養育に掛かる全般的な経済的負担の意識が表れていることから「経済的」因子と名付けた。

第4因子では、あなた自身の自由や好きなことをする時間を妨げる(0.736)、あなた自身の労働負担が大きくなる(0.704)、好きな仕事を続けられなくなる(0.531)などの項目に高い負荷量を示したので、この因子は子どもを持つことにより束縛されることの強い意

識が表れていることから「束縛感」因子と名付けた。

第5因子では、老後の安心を得る(0.587)、家の跡継ぎ、自分の生き方考え方を受け継がせる(0.570)などの項目に高い負荷量を示したので、この因子は自分の家系を絶やしたくない思いの意識が表れていることから「家系継続」因子と名付けた。

表5 子どもを持つことの意識に関する因子分析：Varimax 回転後の因子負荷量（直交回転）

変数名	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
10. 社会から一人前の大人として認められる	<b>0.720</b>	0.124	0.173	-0.013	0.154	0.588
15. 女性としての機能を果たす	<b>0.707</b>	0.082	0.028	0.099	0.241	0.575
14. 地域や社会に貢献する	<b>0.649</b>	0.190	0.061	0.050	0.206	0.506
9. よりよい人として道徳的に進歩する	<b>0.648</b>	0.324	0.081	0.007	-0.088	0.615
1. 子どもを育てる責任感が持てる	<b>0.521</b>	0.190	-0.026	0.058	-0.087	0.318
2. 家族、他人のことが考えられる	<b>0.428</b>	0.383	-0.042	0.093	-0.204	0.381
13. 子どもにはきょうだいが必要である	0.362	0.139	-0.066	0.025	0.109	0.167
19. 新しい生命を誕生させたという気持ちが持てる	0.359	0.174	0.021	-0.099	0.261	0.238
5. 楽しい経験をする	0.137	<b>0.681</b>	-0.039	-0.008	-0.020	0.484
7. 新しい経験をする	0.239	<b>0.610</b>	0.067	0.025	0.029	0.432
6. 夫婦の絆を強める	0.250	<b>0.592</b>	-0.043	-0.072	0.141	0.440
4. 子ども達に囲まれ幸せだと感じる	0.173	<b>0.509</b>	-0.071	-0.083	0.160	0.327
8. 社会活動を増やし人との関係を広げる	0.436	<b>0.449</b>	0.090	-0.046	0.061	0.405
18. 子どもとの時間がもてる	0.228	<b>0.445</b>	-0.141	-0.091	0.196	0.317
11. 子どもの教育費について負担に思う	0.058	-0.003	<b>0.886</b>	0.153	0.019	0.812
12. 子どもの養育費全般について負担に思う	0.076	-0.026	<b>0.865</b>	0.160	0.099	0.790
25. 満足できる生活水準を維持できなくなる	0.024	-0.011	<b>0.421</b>	0.318	0.319	0.529
3. 健康でエネルギッシュであることが必要である	-0.006	0.095	-0.013	0.055	-0.035	0.181
16. あなた自身の自由や好きなことをする時間を妨げる	0.030	-0.051	0.177	<b>0.736</b>	0.103	0.587
17. あなた自身の労働負担が大きくなる	0.032	-0.025	-0.141	<b>0.704</b>	0.042	0.601
26. 好きな仕事を続けられなくなる	0.041	-0.040	0.320	<b>0.531</b>	0.202	0.428
24. 夫婦の時間が減少する	-0.0112	0.030	0.187	<b>0.448</b>	0.497	0.529
20. 自分が望む性別である	0.226	0.014	0.017	0.325	0.224	0.208
22. 老後の安心を得る	0.260	0.038	0.103	0.142	<b>0.587</b>	0.445
21. 家の跡継ぎ、自分の生き方考え方を受け継がせる	0.348	0.064	0.159	0.200	<b>0.570</b>	0.515
23. よい親になれるかという心配が増す	0.228	0.043	0.0884	0.317	0.333	0.273
因子負荷量の2乗和	3.322	2.468	2.119	2.0913	1.667	
因子の寄与率(%)	12.778	9.494	8.122	8.0423	6.410	
累積寄与率(%)	12.778	22.272	30.394	38.438	44.848	

※ 絶対値が0.4以上のものを太字で示した。

## 6. 各因子得点と要因との関連性

1) 第1因子得点（対社会的因子）が表6に示すように母親の教育背景との関連性で、

専門学校卒業と大学以上卒業との間に有意差が認められた。

表6 第1因子得点×母親の教育背景

	中学 n = 14	高校 n = 162	専門 n = 59	短大 n = 43	大学以上 n = 16
平均	0.125	0.009	0.231	-0.155	-0.633
S D	1.000	0.876	0.830	0.902	0.778

\*\* p < 0.05

2) 第2因子得点（体験因子）が表7に示すように父親の教育背景との関連性で、中学

校卒業と大学以上卒業との間に有意差が認められた。

表7 第2因子得点×父親の教育背景

	中学 n = 33	高校 n = 124	専門 n = 42	短大 n = 9	大学以上 n = 85
平均	-0.450	-0.028	0.035	0.215	0.103
S D	0.081	0.860	0.731	0.690	0.769

\* p < 0.01

3) 第3因子得点（経済的因子）が表8に示すように子どもの数との関連性で、1人の

子どもを養育しているより、2人以上の子どもを養育している方が有意に高かった。

表8 第3因子得点×子どもの数

	1人 n = 99	2人以上 n = 195	有意性
平均	-0.165	0.084	t = 2.186
S D	0.924	0.919	**

\*\* p < 0.05

同じく、第3因子得点が表9に示すように第1子を持つ迄の年数との関連性で、0～2年より3～5年の方が有意に高かった。

各因子得点と要因との関連性をまとめたのが表10である。

表9 第3因子得点×第1子を持つ迄の年数

	0～2年 n=244	3～5年 n=46	6～8年 n=3	9～11年 n=1
平均	-0.066	0.378	-0.748	0.943
S D	0.927	0.792	0.969	0.000

\* p &lt; 0.01

表10 各因子得点との関連要因

因子名	要因
第1因子得点 (対社会的因子)	母親の教育背景
第2因子得点 (体験因子)	父親の教育背景
第3因子得点 (経済的因子)	子どもの数 第1子を持つ迄の年数

### Ⅲ 考 察

#### 1. 結婚後に子どもを持つ迄の年数と子どもの数について

国立社会保障・人口問題研究所<sup>3)</sup>によれば、結婚後に子ども持つ迄の年数は第1子が1.6年、第2子が4.5年との報告がある。今回の調査でも、結婚後に子ども持つ迄の年数は第1子の平均が1.6年、第2子が4.0年であった。このことから、国立社会保障・人口問題研究所の結果とほぼ一致する。

次に、子どもの出生順位別構成をみてみると、平成10年の厚生労働省の統計<sup>4)</sup>では第1子が48.5%、第2子が36.5%、第3子以上が15.0%で、第1子が5割弱を占めている。今

回の調査地の浦河町においては、第1子が33.7%、第2子が48.3%、第3子以上が18.0%だった。従って、浦河町では第1子が占める割合が全国に比べて少なく、第2子及び第3子以上の占める割合が全国に比べて多く、第2子と第3子を合わせると66.3%を占めた。このことから、浦河町では一人っ子が少ないことが分かる。

子どもの数を母親の就業状況別にみてみると、有職者の平均が2.183人、専業主婦の方は1.747人と有職者の方が有意に多かった(p < 0.0001)。更に、母親の教育背景別にみてみると、高学歴になるに従い有意に少なくなり(F(5, 288) = 2.804. p < 0.05)、世帯の年収別にみてみると年収が多くなるに従い有意に多かった(F(5, 155) = 2.397. p < 0.05)。

同様に、夫の職業別にみてみると、会社員と公務員の平均が3.0人なのに対して農業・漁業等では4.3人と有意に多かった(p < 0.005)。夫の職業別の子どもの数に関しては、国立社会保障・人口問題研究所<sup>5)</sup>の報告でもホワイトカラーの場合は少なく、農林漁業の場合は多いと述べられており本調査と一致する。

## 2. 理想の子どもの数と将来予定している子どもの数について

夫婦が理想とする子どもの数の平均は2.8人であった。また、将来予定している子どもの数、ここでは生涯を通じて持つであろう子どもの数のことを意味しているが今回の結果は平均2.5人であった。このことは、理想とする子ども数の方が多いのだが、諸般の事情により生涯を通じて持つであろう子どもの数は理想とする子ども数を下回っていることが示唆される。加えて、現在養育している子ども数と理想の子どもの数との間には正の相関関係が認められる ( $R=0.45$ ,  $p<0.001$ )。即ち、子どもを多く希望した夫婦は実際に多くの子どもを養育していることが分かった。

## 3. 因子分析による考察

子どもを持つことに対しての母親の意識は、因子分析の結果5因子が抽出された。

第1因子には「対社会的」因子が抽出された。柏木<sup>6)</sup>は、母親が子どもを持つ時の理由として、潜在的に身内や職場など周囲の人々を意識した気持ち、即ち対社会的評価意識があると指摘している。産む性としてこの世に生を受けた女性が、男性には無い子どもを産むという機能の発揮は現代において、一見古い価値観のようにも受け止められるが女性の潜在意識の中に存在することは否定は出来ないように思われる。このような意識が反映された結果なのではないかと推察される。

第2因子には「体験」因子が抽出された。

加藤<sup>7)</sup>が札幌市で行った先行研究でも、我が子を育てるという新しい経験に対する高揚感が同様に因子として得られた。育児書に書かれているようにマニュアル通りにはいかな

い育児は時には不安も与えるが、多くの母親は育児に対して新鮮な感動を得ているのも事実である。先の柏木<sup>8)</sup>も子どもがいることで家庭が賑やかになり、生活に変化が生まれるなど家族や夫婦の生活にとって子どもを持つことに対して情緒的価値が見いだされると述べている。ことから、未知の新しい体験に期待する意識というのは子どもを持つことに反映する意識として受け止められる。

第3因子には「経済的」因子が抽出された。子どもの養育費、医療費、さらに将来の教育費など子どもを養育する上で経費がかかる意識は子どもを持つ時大きな影響を与えていることが窺える。

北海道における調査でも<sup>9)</sup>、理想の子ども数が実現出来ない理由の第1位に、「子どもを育てるのにお金がかかる」との回答が最も多かった。この経済的理由というのは、個人的な事情もさることながら、一方で我が国の少子化に対する施策の乏しさが強く反映している結果とも受け止められる。

第4因子には「束縛感」因子が抽出された。子どもを持てば、自ずとライフスタイルの変化を余儀なくされる。有職者の場合は尚のこと有形無形の束縛を受けることは避けられないであろうことは想像に難くない。「好きな仕事が続けられなくなる」の回答が専業主婦に比べて有職者の方が2倍多かった。このことから、子どもを持つことにより仕事が中断することへの危惧感が強く窺える。さらに、保育所の未整備など育児を支える環境が十分でないがために産後の職場復帰が保証されない不安感もさらに加わるであろう。これらの事情が複合的に、子どもを持つことへの束縛感に強く反映しているのではないかと推

察される。

第5因子には「家系継続」因子が抽出された。自分の代で家系を絶やしたくない、自分の子孫は継続していきたいとの思いが子どもを持つ意識として反映した結果と考えられる。

#### 4. 各因子得点と要因との関連性について

各因子得点と要因との関連性は、第1因子得点（対社会的因子）、第2因子得点（体験因子）、第3因子得点（経済的因子）と要因との間に関連性が認められたのでこの観点から述べていきたい。

第1に、第1因子得点（対社会的因子）が母親の教育背景との間に関連性が認められた。全体的に短大・大学以上の卒業より中学・高校・専門学校卒業の方が有意に高かったが、これは子どもを持つことにより社会から一人前の大人として認められる、また女性として機能を果たすと言う意識は高学歴になるに従いその中に価値観を見い出さない傾向にあるのではないかと思われる。先述したように、高学歴になるに従い子どもの数が少なくなることと符合する結果と考えられる。

次に、第2因子得点（体験因子）が父親の教育背景との間に関連性が認められた。全体的に中学・高校・専門学校卒業より短大・大学以上の方が有意に高かったが、これは新しい経験をする、社会活動を増やし人との関係を広げるなど良い意味での好奇心が反映した結果なのではないかと考えられる。

最後に、第3因子得点（経済的因子）が養育している子どもの数、第1子を持つ迄の年数との間に関連性が認められた。養育している子どもの数との関連性では、1人より2人

以上の子どもを育てている方が有意に高かった。これは、子どもに要する費用は子どもの数が多くなるに従い負担感が増すことを示していると考えられる。

さらに、母親が第1子を持つ迄の年数との関連性は、0～2年より3～5年の方が有意に高かった。これは、夫婦だけの生活に新たに子どもが加わることにより、子どもへの出費に対して夫婦2人だけの生活が長いほどその負担感を重く受け止めていることが示唆される。

#### おわりに

以上、浦河町で1年間にわたり子どもを持つことに関しての母親の意識調査を行った。少子化は浦河町でも例外ではなくここ数年の年間出生数は平成10年が168人、平成11年が157人、平成12年が170人であるが、過去10年間に於いては出生数は緩やかに減少の傾向がみられる。

そのような状況下での調査なので、1年間に行われる調査にも限りがあったが役場の協力を得て300部弱の回答が得られたことは幸運であった。

今回の調査で、浦河町では養育している子どもの数が全国平均より多いなど若干の地域的な特徴が見られた。これらを踏まえ更に今後の研究を深めたいと思う。

#### 謝辞

この論文の作成にあたり調査を承諾して頂きました浦河町役場の職員の皆様には深く感謝致します。特に、担当の佐々木孝子さんにはご多忙のところご協力頂き心よりお礼を申し上げます。



## 引用文献

- 1) 厚生統計協会. 厚生 の 指標 国民衛生 の 動向. 2000, 47(9), p. 45.
- 2) Vinokur-Kaplan, D. Family Planning Decision-making: A Comparison and Analysis of Parents' Considerations. Journal of Comparative Family Studies, 1977, 8(1), p. 82.
- 3) 国立社会保障・人口問題研究所. 第11回出生動向基本調査結婚と出産に関する全国調査-夫婦調査の結果概要-. 1998, p. 9.
- 4) 1) 前掲. p. 45.
- 5) 3) 前掲. p. 9.
- 6) 柏木恵子. 子どもという価値-少子化時代の女性の心理. 中公新書, 2002, p. 70.
- 7) 加藤春子. 子どもを持つ母親の意識の違いに関連する諸要因の考察. 北海道浅井学園大学生涯学習研究所紀要. 2001, 創刊号, pp. 81-95.
- 8) 6) 前掲. p. 71.
- 9) 財団法人 北海道青少年育成協会. 北海道における少子化に関する研究. 1999, No1, p. 61.
- 両親の意識分析. 筑波大学医療技術短期大学研究報告. 1991, No. 12
- 5) 松浦賢長. 既婚合計出生率の低下にかかわる夫婦の出産意識とその関連要因-1990年代初頭の状況分析-. 母性衛生. 1999, 40(4)
- 6) 松浦賢長. 30代初産婦の妊娠・出産に対する意識調査-20代初産婦との比較を通して-. 母性衛生. 2000, 41(1)
- 7) 見田宗介. 価値意識の理論. 弘文堂, 1996
- 8) 鈴木里加, 高橋つや子, 鈴木和代他. 子どもを産むことに関する調査. 母性衛生. 1996, 37(1)
- 9) 総理府広報室編. 月刊世論調査-少子化-. 1999, 31(10)

## 参考文献

- 1) 阿藤誠. 日本の超少産化現象と価値観変動仮説. 人口問題研究. 1997, 53(1)
- 2) Hoffman, L.W. & Hoffman, M. The value of children to parents. A Social Psychological View Fertility. 1973
- 3) 石井明治, 本間寿彦, 浜田宏. 何人のお子さんを生みますか. 母性衛生. 1993, 34(1)
- 4) 小松美穂子, 村井文江, 諏訪久美子他. もう1人子供を持つ, 持たないに関係する

Maternal Considerations Concerning Having Children  
-The Case of The Survey in Urakawa-

Haruko KATOH

**ABSTRACT**

The purpose of this thesis is to analyze the considerations and factors affecting mothers having children. The subjects were 294 mothers raising children between the age of 4 months and 3 years.

The parental considerations for having children used for the questionnaire in this thesis are those of Vinokur-Kaplan.

Analysis of the survey results highlighted the following five factors; "meta-personal" as the first factor, "experience", as the second, "economic" as the third, "feeling of being trapped" as the fourth, and "genealogical continuation" as the fifth.

Additionally, relationships with the above factors are identified as follows; the relationship between the first factor and mother's educational background, the relationship between the second factor and father's educational background, the relationship between the third factor and the number of the children being raised and also the relationship between the third and marital duration prior to the birth of the first child.

**Key words** : considerations, have, children, mother, parent